

表紙

自分AtoZシリーズ「芝原キヌ枝 三十一文字 AtoZ」

発行日 令和2年9月1日

作者 芝原キヌ枝

協力 大カ浩二・聡美(デザイン)、
山本ひとみ、白藤友子、塩見直紀、
お泊りいただいたすべての皆さま



MESSAGE

『『あなたのAtoZ』を考えてみませんか?』と塩見直紀様より、思いもかけないお褒めを受けました。その途端、「そうだ今までに詠んだ短歌をあてはめてみようかしら?」と閃きました。

拾う作業故に、簡単に楽しく、また数少ない写真も引っ張り出してきてあれこれと拾う。わくわく感じっぱいの楽しい小冊子作りでした。

米寿を迎えて

令和2年9月1日 芝原キヌ枝



芝原キヌ枝

昭和七年京都府何鹿郡（現在の綾部市上林地域）生まれ。嵯峨御流生花師範。綾部市にて初の農家民宿所を六十九歳にして開き、多くの旅行者、若者に綾部の自然の中で生きることの素晴らしさを伝える先駆者となる。農家民宿は既に閉じているが、その貢献は、綾部の農家民宿のレジェンドとして語り継がれている。今の夢は、自宅で縁側喫茶を始めること。

プロフィール

昭和七年九月一日

京都府何鹿郡中上林村

昭和二十二年四月

大字八津合小字神谷五香地生まれ

昭和二十八年四月

丹和銀行（現：京都銀行）入行

昭和四十七年

結婚 五反百姓に嫁ぐ

平成十四年四月一日

嵯峨御流生花教室を始める

農家民宿開所（六十九歳）

農家民宿開所（六十九歳）

CONTENTS

AI
A 藍
BIOTOPE
B ビオトープ
CONCEPT
C コンセプト
DANDAN BATAKE
D 段々畑
EGAO
E 笑顔
FUKUSHIMA
F フクシマ
GUTS
G ガッツ
HANA
H 花
ISHI
I 石
JOUHOU HASSHIN
J 情報発信
KYO
K 峡
LONG
L ロング
MIDORI
M 緑

NEW YORK
N ニューヨーク
OB KAI
O OB会
PIMAN
P ビーマン
QUEST
Q クエスト(自己探求)
RETIRE
R リタイヤ
SHOKUTAKU
S 食卓
TAKE
T 竹
USHI
U 牛
VISION
V ビジョン
WA
W 輪
X
X X
YUTAKA
Y 豊か
ZUIDO
Z 隧道

3

4



A 藍

藍淡き麻ののれんに掛け替えて
土間に明るき夏を迎うる
赤ん坊の頬ぺのような小蕪穫り
おすそわけするレシピも添えて

B ビオトープ

居ながらにもビオトープと思ううつろいを
愛でつ峡に傘寿迎うる
貧乏には強いと気をはく旅の宿
われら昭和いと桁生まれ

C コンセプト

小さな会本のいろいろ廻りくる
今日は手元に「生きて死ぬ智慧」
巡り来り十二月八日鎮魂の
イルミネーションで庭に光る

5



DANDANBATAKE



EGAO



FUKUSHIMA



GUTS



HANA



ISHI

6

D 段々畑
 段畑に 据えーブランコ 漕ぐ子らの
 声の降りくる 民泊日和
 だんごりの 屋根の上^えに跳ぶ 好青年
 「虫はきらい」と 逃げ回るわが宿

E 笑顔
 長兄を 戦地へ送りー 後母は
 寡黙となりて 笑顔失せにー
 この言葉 憶えていますか 「栄養失調」
 昭和二十一年 母逝きー病名

F フクシマ
 フクシマに 何を学ばん 七月の
 峡田のむこうに 原発の狼煙
 二畝^{ふたせ}余の 野菜もろもろ 子に持たす
 「もらってくるのも 親考行やで」

G ガッツ
 新しい 靴苦心ー 履き終えて
 優くん三才 ガッツポーズする
 八段の 稲架^{いんか}の高きに 稲掛けを
 終えて 仰げば 月・中天にあり

H 花
 秀^は先まで 咲きのぼりたる 立葵
 透ける花びら 燃え尽きるまで
 大霜を みたびよたびと 被きたる
 庭の母子草 黄の色失せず

I 石
 今はもう 用なき石に なりたれど
 土間に残せる 藁打ち石よ
 道ーるべ 「従より南 丹波国」
 峠に有りーも 失せて悲ーき



J 情報発信
 わが里は緑豊けく空気・米
 旨きよ来たれ 民宿の増ゆ
 数少ないわが旅行のうち 忘れ得ぬ
 知覧特別攻撃隊基地

K 峡
 風花を口に入れんと幼ならば
 嘻嘻と一峡の風花のなか
 蛙・蟬 河鹿川音鳥の声
 あふるる峡を 静かと客は

L ロング
 傘寿なる 祝いを友にいただきー
 詩集「百歳」もすこー生きよう
 「大地が好き 花が好き そーて何より
 人が好き」と 農に生きこー

M 緑
 積む雪の水垂れの岸に 緑濃き
 水仙つぼみを 抱き伸び初む
 蟬ぐれ 緑に 沁みて 柔らーと
 喧騒の街の 青年くつろぐ



O OB会
 われらみな 清く正しく 勤めーと
 OB会の 案内状くる
 鯉のぼり 泳ぐ古墳を 娘と訪えり
 峡見はるかー 大きい息吸う

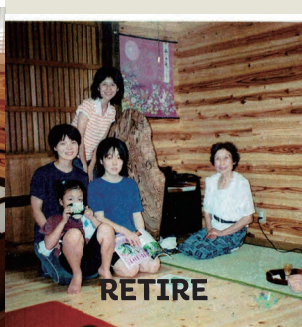
N ニューヨーク
 ニューヨークへ 旅立つ女孫 偲びつつ
 眠ればわれは 宇宙に遊ぶ
 小春日に こんやく芋を 掘るわれは
 いそーみー 姑の 農を 継ぎたり



PIMAN



QUEST



RETIRE



SHOKUTAKU



TAKE



USHI

P ピーマン

「ピッカピカの元気なピーマンありがとう」
孫から届く今朝のFAX
広島の慰霊の鐘に黙祷す
畑にピーマンを収穫一つ

Q クエスト(自己探求)

いとこにーて行きたいねーて行こう
子らのーやぼん玉河川敷に舞う
「なぜここ(へ)?」「体がここと言いまーた」
わが峽に住む外つ国の人

R リタイア

リタイア後竹炭焼くとう 男性訪えば
木漏れ日の下窯開きおり
谷間の若きふたりのログハウスを
訪いて語りね農のことなど

S 食卓

笹百合を片手に野良より戻りこー
亡夫を恋ーむタバーらトラ
早わらびの玉子とト旨きと青年は
わが宿の膳にその祖母を恋う

T 竹

築山の黒竹に露耀えり
わが短歌一首 吊るす七夕
竹製の友の手作りテーブルに
木漏れ日ゆるる赤とんぼ止まる

U 牛

どの家も子沢山にて牛も居ー
めぐりの九戸減りて五戸なる
裏山のなだり一面ーやがの花
豪雪に裂かれー杉木立の中

11



VISION



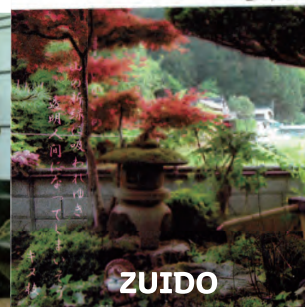
WA



X



YUTAKA



ZUIDO



Z 隧道

平成とタイプに活字組み入れー
 そうかあれから三十年か
 記憶とう裡なる塊のはがれゆく
 氷山大海に欠けてゆくごと

Y 豊か

早春の光を返す鋏先の
 踊りて豊かな土と生くべー
 この辺と積む雪分ければ出できたり
 万年青豊けく赤き実抱きて

X X

半農半Xに導かれ
 われ半民泊を開きー晩年
 シンガポール座間味・夕張へ来よという
 縁増えゆくわが七十年代

W 輪

大戦のかなりみ土に還るまで
 盆の踊りの輪の中に居り
 猿・猪と分け合い拾いー栗の実を
 知人へ送るわが幸とーて

V ビジョン

立命大の平和ミュージアム見学す
 われの来世は大学に学ぶぞ
 ふるさとの信楽に還り「ぼちぼち」と
 いう名の宿を開くと君は

12

芝原キヌ枝の“おゆみ”



わがふるさと寺町

昔、何鹿の北海道と云われた中上林は中心地、寺町は古は君尾山光明寺の末寺として寺が並び宿坊として栄えたと聞く。北は愛宕山を背にして南に広く、小高い藤懸城跡の麓を流れる上林川は肥沃な田畑を擁している。小学校・登記所・役場・駐在所・医院・信用組合（現JA）郡是上林工場・銀行と続く道路の両サイトには各商店が軒を連ねてにぎわい大変活気ある田舎街であった。

生活改善グループ「水引草」



平成4年春、農業改良普及所より「グループをつくれ」と再三の来宅。土ばかりいじっている五泉町の女性に声をかけ「グループ水引草」が誕生。ご指導を受け乍ら、もろみ、五泉しぐれ、きな粉飴、山菜ごはん等に取り組んで、イベントにも出店し農の傍ら結構忙しく楽しんだ。ところがO157の流行の年、市内の各グループ銘々の加工所を持つべしとのお達し。味工房という市の完璧な加工施設を利用していたので問題ない筈だが解散に至り、百姓のおばさん達の意欲、元気が潰れたことは残念であった。



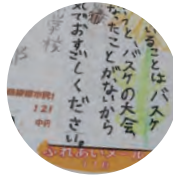
里山交流大学一期生

あれは何年前になるのだろうか。里山ねっと・あやべに於いて開催されるこの講座の募集をしり、もし空席があればと申し込む。定員30名中29番目で入学。夏期・秋期・冬期それぞれ二泊三日を、若い皆さんと寝食を共にし、毎回素晴らしい講師に学ぶ。特筆すべきことあり、超多忙の時の市長、四方八州男様は毎回出席されて机を並べて学んだことである。その後、同窓会もあり、それぞれの分野でご活躍の懐かしいお出合いであった。



京都創成大学（現：福知山公立大学）公開講座

平成21年京都市北部首長によるリレー講義を紙上で知り受講する。各行政機関の地域にかけける熱い想いを首長から拝聴する機会を得て感銘。翌22年は「成美大学」と名称を変更された年で、「地域から世界へ」～奥京都塾～と題し、第一線で活躍の地域内の方々の講座で楽しく学んだ。井の中の蛙の私の視野も少しは広がっただろうか？



綾部市ふれあいメール事業

平成17年より毎月、曾孫くらいの少年少女から葉書が届く。それは豊里小学校の児童からで、時候挨拶に続いて学校の様子、自身の目標や、今頑張っていること、取り組んでいる事、中にはイラストや俳句入りもあったりして、感心したり嬉しくてめっちゃ可愛い。事業故いつおしまいになっても仕方ないと思いつつ、楽しい交流が続いており、初期のお子さん達は既に社会人として立派にわが道を歩んでいられる事でしょう。人生には挫折や失敗はつきものです。恐れず前を向いて頑張てね。お便りくださった多くの小学生の皆さんの前途を祝して。



上林歌会

昭和58年1月、お声をかけて頂いて22名で発足。当初のメンバーは鬼籍に入られたり、又多くの仲間の出入りがあったりした中で、合同歌集「かんばやし」を二回発刊している。38年目となる現在、西園寺祥子先生をお迎えし、又良き後継者の下、毎月一回楽しく勉強会が続いており嬉しい限りである。会員募集中です。お声をかけて下さい。